

子宮頸がん検診受診率を上げるために

樋口愛実・助産学大学院生

講義前にタイトルを見た際に、内部告発がなぜ、ボランティアなのか、とても不思議に感じました。

しかし、講義を聞くうちに、自分の社会的地位を危険にさらしてまで、実情を公表することが、ボランティア精神と関連しているのだと理解しました。

そして、講義を聞く中で、先日、シリアの拘束から解放され、無事に帰国したジャーナリストを思い出しました。

ニュースを見たとき、なぜ、自分の身を危険にさらしてまで、戦地に赴くのか、とても不思議でした。しかし、本日の講義を聞き、社会的環境を変えたくて、自分の身を危険にさらして戦地に赴いているのではないかと感じました。ジャーナリストの仕事が、戦地の実情を把握し、社会に公表することであると考えるため、自分の身を危険にさらしてまで、戦地に赴いていたのだと改めて認識しました。

同じように、内務告発をする人も、社会を変えたくて、実情を社会の人に知ってもらうために、告発を行っているのではないかと考えます。

前期の授業で、ウィメンズヘルスをテーマに興味をもった事柄を、文献検討する機会がありました。

私は、子宮頸がんについて調べました。調べていくうちに、日本の子宮頸がん検診受診率の低さにとても驚きました。学生間で話し合いを進めていくうちに、子宮頸がん検診を受信しない理由として、「恥ずかしい」「自分は大丈夫なのではないか」「男性の医師だから」があげられました。一般女性も同じような思いを抱いているのではないかと考えます。

受診率が高い他国では、定期的に婦人科を受診する習慣が身についています。習慣化されている理由として、幼少期に母親と婦人科を受診しており、かかりつけ医が決まっていることがあげられていました。

日本では、性に関することを親が子どもに話すことを恥ずかしいと感じている人が多いこと、親自身の婦人科受診が定期的でないことが考えられます。このような現状を打破するために、同性である助産師が検診を受けやすい環境を作る必要があると考えます。また、助産師が検診技術を身に着けることで、「男性医師だから」「恥ずかしい」という理由から受診しない女性は減少するのではないかと考えます。

助産学生として、これからの検診率を増加するために、何をすべきなのかを考えていきたいと思えます。